朝鮮文化の將來[[1]](#footnote-1)

李光洙

半島文化の本流

一概に朝鮮文化と云つても何を指すのか一寸合點が行かない。遠く檀君時代まで遡らぬまでも、三國時代あり、高麗時代あり、李朝時代あり、又同じ李朝時代にしても、その初期と末期とでは、著しく特色を異にして居る。

茲に於いて、朝鮮の文化の本流は何んであるかと云ふ問題に逢着する譯である。卽ち、或は漢や隋唐の、或は元、明、清の支那の文化や、佛教文化の影響を受けつゝも、依然その主體たるところのものを摘出することが出來るとすれば、それが卽ち朝鮮文化の本流でなければならぬ。併しながらこれは、多くの角度から研究されて後に始めて、確められるべきであつて、未だ全然未開發の儘と云つても好い位の朝鮮文化史としては、輕々に斷案を下すことは、愼まなくてはならない。併し朝鮮文化の將來に就いて、何か意見を述べることを編輯係より命ぜられた私としては、まづ朝鮮文化の本流に就いて、未熟ながらも、私の所信を開陳せざるを得ない。

最初に、私の考へとしては、文獻として殘れる朝鮮史の信憑性の極めて薄弱なる點を認識することから始まらなければ、朝鮮文化の正體を握むことは難かしいと云ふことを力説したい。朝鮮の歴史としで、今日まで殘れるもので基本的なものが三國史記であるが、これは、その著者たる金富軾の、支那崇拜思想の一方便として書かれたもので、當時まで傅はつた秘記、古記、秘誌等は勿論のこと、高句麗、百濟、新羅の歴史さへも、或は默殺し、或は改竄して了つて、自分のイデオロギで歪められた事實や解説をのみ、これを傅へ、その他の史料は、自分が宰相の地位にあるのを利用して湮滅せしめて了つたのである。この小論文に於いて、金富軾の史論を批評する餘裕はないが、新羅等の王が年號を使用したことや、朕と稱し、崩と稱したことさへも、これを非禮として、支那の諸侯の例に倣つて、寡人とか、薨とか云ふ文字に改め、年號等は全然削除して、支那の年號を代入した一例を見たゞけで、思半ばに過ぐることゝ思ふ。

　殊に朝鮮文化の淵源にして、中心たる古神道に對しては、これは先王（彼にあれば堯舜文武王等を意味する）の道にあらずとして默殺し除斥したのであつて、その後、鄭夢周の斥佛、排仙を經て、李朝の成宗、中宗朝に至りて、此の支那崇拜思想は、その絶頂に達し、凡べて古朝鮮的なものをば排斥し、完全に支那を模倣しようとした。彼の趙光祖等は數千年來連綿として續いて來たところの、祭天の儀までも、諸侯の道にあらずとして、之を廢止せんことを奏請し、當時の所謂儒林達は、やんやと之に和して遂に永久に之を斷絶することに成功したのである。

この祭天の儀こそは、朝鮮文化の淵源と云ふべきであつて、朝鮮人の信仰、政治、社會、人生觀は凡べて、この根本思想から割出されたのであつた。かの朝鮮の建國神話たる三神傅説、神人下降傅説、昇天傅説等は、實に之を物語るものである。卽ち宇宙の主宰者たる「桓仁」の子桓雄、桓雄の子、王儉が太白山の檀木の下に降つて、神市を作り、その神市に於いて三百六十條の律令を定め、こゝに地上の國家が成り、これをなし終るや、王儉は再び天に上つたのである。

この王儉を支那の史籍には、仙人王儉と呼んで居るが、この仙と云ふ語は支那の仙と云ふ語とは決して同義でない。それで、新羅では、王儉の道を國仙道と稱して、支那の仙と區別したのであつた。

國仙道は、新羅計りでなく、高句麗や百済にも共通であつた様に思はれる。「祭天」の儀は三國の史記に共通に現はれて居り、而もそれは八月から十月にかけて行はれて居つた。これ丈の材料は金富軾の三國史記にも遺つて居る。

國仙道は朝鮮の古神道であるが、これは母論漢字を當てゝからの稱呼で、元朝鮮語で何んと呼ばれて居たのかは解らない。但國仙道の信仰の本尊がハナニム（하나님）であり、人世に於ける神としての本尊がカムニム（검님）、王儉、仙王（서낭님）、大神等と呼ばれ居たことは、種々な記録や、今日まで民俗に殘つて居る言語等で推斷することが出來る。

新羅史には、「王神宮に幸す」[[2]](#footnote-2)と云ふ條項が第三代王の記録以來に處々に見える。而もその神宮は、始祖廟より上位であつた。神宮、始祖廟、山川神祗の三種の祭祀が年々一定の時期（新羅にては八月十五日[[3]](#footnote-3)、高句麗にては十月、三韓時代にも十月）を定めて、國王の親祭で行はれて居り、その節には男女文武の諸々の競技や大衆的な催物があつたと記されて居る。

これは國家としての祭禮であるが、民間には部落毎に堂、又は神祠と呼ばれる神社があり、特に首都の鎭山や南山には、大規模なものがあり、名山にも國仙の靈場のない所はなかつた。かゝる神社が官令で廢されたのは李朝威宗、中宗の時である。所謂淫祠廢止なるものだ。

併し國仙道は祭祀のみではない。新羅史を讀んで見れば解る様に、これは宗教、政治、武術、藝術の修錬を含めたもので、有名な國仙の下には數千の門徒があつて、一種の宗教的團體を作り、その門徒等は、師たる國仙道場にて宗教的、政治的、武術的、藝術的修錬をしたもので、十七歳が卒業期であつた様に思はれるし、この國仙の道場こそは、國民教育の淵叢であつたのである。

崔致遠が、その撰、鸞郎の碑にこの國仙道の要領が書いてある。「吾東有道號曰國仙」[[4]](#footnote-4)を冒頭として、佛の慈悲も、儒も仁義も、道教の清らかさも兼ねた、神ながらの道があつて、偉い文臣も武將もこの中から出て居ると、云ふ意味のことが書いてある。「吾東」[[5]](#footnote-5)とは朝鮮半島のことである。崔致遠は新羅人で唐に於いて文名を馳せた、云はば唐化人物であるに拘はらず、國仙鸞郎の碑文に、かくも國仙道を[[6]](#footnote-6)したのが特に注目に値するではないか。

さらに、この國仙道の倫理的内容として、五個條の所謂世俗五教なるものが、新羅の名僧の言として三國史記[[7]](#footnote-7)に傳はつて居る。卽ち

　一　君に事ふるに忠を以つてせよ。

　二　父母に事ふるに孝を以つてせよ。

　三　友と交はるに信を以つてせよ。

　四　陣に臨みて退くことなかれ。

　五　生物を殺すに擇ぶことあれ。

と云ふのがそれである。世俗五教と云ふのは佛教の立場から見てのことであつて、國仙列傅を讀んで見れば、國仙卽ち花郎達が如何にこれらの五個條の實踐者であつたかゞ解る。官倡郎、斯多含等は、その適例であらう。

吾人は新羅史（主として三國遺事、三國史記を指す）に書き殘され的[[8]](#footnote-8)の材料だけを以つてしても、國仙の全貌を把握することが出來る。卽ち天地の創造者にして主宰者たるハナニムを信じ、そのハナニムが人間世界を教へ治めんが爲にその子カムニムを世に遣はされ、そのカムニムが人間と現はれては王となり、隱れ給ひては神となられるのであること[を]信じ、斯様に神を敬ひ、神のたる王に忠義を盡し、父母に孝に、一般同胞とは信を以つて交はり、そして、國家のためには、一旦緩急あれば、陣に臨みて退くことなく、而もなるべくは、生類を慈しみ、これを殺害するなと云ふのである。更にこれを要約すれば、忠、孝、信、勇、仁の五徳は神に對する信仰に根ざして居り、殊に王は神の現大身として忠を以て、これに事へると云ふ精神は、新羅千年一系式の王統を保つたことで實修されて居る。高句麗や、百濟もそうであつた。高麗の王建や、李朝の太祖が所謂易姓の革命を敢行したのは、支那思想の影響を受けたと云ふべきであらう。それにしても王建は高句麗の王統の後繼者として任じ、李太祖は新羅の後繼者として任じた。

國仙の修錬方法に就いても、歴史に現はれたことだけで、略推察することが出來る。卽ち十七歳までは師の道場でみつちり文武の訓練を受け、こゝに一人前の花郎になると多くは名山に歴遊して、或は仙王の靈場（今日朝鮮の寺刹に山神堂として、大雄殿よりも一段高き所に祭つてあるのが、その遺跡であるが[、]山神堂とは好い加減な漢文式當字たること論を俟たぬ）に於いて、祈禱の靈性鍛錬をなし、或は膽力と武術を錬り、或は歌を歌つて藝術的情操を涵養したのである。金剛山、太白山、智異山等は、その尤も著名なる靈場で今尚永郎等の傅統[[9]](#footnote-9)が殘つて居る位である。金剛山は佛教が開發した名山ではない、國仙の靈場に佛教の伽藍が建てられたのであつて、云はゞ神佛融和であつた。かの有名な異次頓が新羅の法興王の時に佛教の爲に殉死したのは實に神佛、もつと正確に云へば仙佛衝突の犠牲になつたもので、異次頓の雄々しき死は仙佛の融和を齎したのであつた。

花郎（國仙と略同義である）と歌とは大いなる關係がある。新羅では歌は神聖なもので、兵亂があるとか、旱魃とか、疫病が流行る時には歌を作つて神に捧げたり、音樂や舞踊で神を慰め奉つたりしたのであつた。萬波息笛や、處容舞などの例を擧げなくても、新羅史の所々にさう云ふことが書いてある。琴曲の發達や、今日雅樂として殘れる新羅樂も國仙道の遺物であり、眞聖女王代の勅選歌集三代目と云ふのも花郎の歌詠であつたと思ふ。新羅の歌、所謂郷歌として、今日尚殘つて居るのが二十六篇計りあるが、これは主に佛功徳を讃美する歌であるが、これ卽ち歌が元神に捧げまつつたものである證左とも云へる。

尚、國仙の傅記が新羅史に列傅として殘つて居るが、これを讀んでも國仙道の内容が十分歸納し得られると思ふ。卽ち神を信じ敬ひ、忠孝を本とし、信義のためには生命をも絶ち（斯多含は友人との約束を果さんために食を絶つて死んだのであつた）、戰場に於いては死を恐れず（官倡郎の例）、而も慈しみと藝術的ゆとりを持つて、「風月徒」とか、「白雲香徒」を以て世間から呼ばれた位の氣品と風流と悠揚さを備へて居た風貌が窺はれるであらう。讀者にして若李王家の雅樂を聽かれたことがあるとすれば、その時の心境こそは國仙道人の心境であらうと思ふ。實に古朝鮮の精神を尤も完全に保存して居るのは朝鮮音樂であると、私は常々信じて居る。そして、古朝鮮のこの氣分は、今日の朝鮮人の中にも、往々見出される。

この國仙道の信仰的な部分は七百年來、殊に李朝中宗以來四百餘年間虐げられつゝも、或は檀君崇拜の宗教の形を取つて或は仙王やタイカムや山神崇拜の民間信仰の形を取つて今尚傅はつて居るし、そのハナニム（主宰）崇拜の精神は今でも朝鮮人全體の魂に泌み込んで居り、而してその藝術的の部分は歌や音樂や舞踊として微々ながらも續いて居る。最後にその倫理的部分たる忠孝の觀念も、支那式忠孝の徳目に置き代へられたとは云へ、矢張傅統的な觀念を失はずに居る。つまり、いくら剝いでも剝ぎ切れず、いくら洗つても洗ひ切れない部分が未だに朝鮮人の心に殘つて居ると云へよう。然らば、これこそは朝鮮文化の本流ではなからうか。（以上は新羅を中心に述べたのであるが、高句麗も百濟も將又高麗王朝も國仙道に關する限り共通である。）

朝鮮文化の将來

若し國仙道が朝鮮文化の本流であるとすれば、今後の朝鮮文化は、如何なる方向を取るであらうか。

以上述べたことによつて朝鮮文化の本流が如何に日本文化の本流と酷似して居るかが解るであらう。否酷似と云ふよりも同一と云へるだらうと思ふ。その何れが先で何れが後であるかは史家の研究に俟つべきであるが、その内容が同一であることだけは事實と斷言し得ると思ふ。今日の朝鮮と今日の日本との差異相は主として、朝鮮の支那化から來たものであつて、その本質は同一のものなのである。この點に重要な示唆が含まれて居るものと思ふ。

卽ち精紳上、文化上の内鮮一體は朝鮮側から見れば、結局一種の復古に過ぎないのである。言ひ換へれば一時被されて居つた支那服を脱ぎ棄てゝ先祖時代の元の服装に返るに過ぎない。神を敬ふこともさうであり、忠孝中心の道徳も又然り、人情、風俗の主たるものに至るまで然りである。約言すれば朝鮮人は日本文化の中に千載前の朝鮮人自身の姿を見るのである。この點に就いては實に夥だしい材料があるのであるが、已に私に與へられたるスペースは盡きて居る。

扨今日の朝鮮文化なるものゝ中には自然消滅の過程を踏むのもあらう。或は強制的に消滅させねばならぬものもあらう。それは支那化された部分や、内鮮一體に差障はりとなる部分や、又は今日の時勢に合はぬ部分等であるべきである。併し又一面には、新しき國民文化に吸収される要素もあらう。或は朝鮮だけの地方文化として生命力を保つ部分もあらう。今朝鮮がもつた言語や文學や風習はこの部類に屬すべきである。最後に、朝鮮文化の中には、今後益々輝いて、單に全日本の文化に光彩を添へる許りでなく、世界文化に貢献すべきものもあるであらう。これは國仙道の眞髓から湧出づべきものだと思ふ。

その何れにしても、私の見るところでは、朝鮮文化は、日本文化と融合するために始めて久しき不當の抑壓より脱してその使命を發揮し、燦然たる光彩を發する日の遠からざるべきを信ずる。

若し朝鮮文化と日本文化とが質的に相背馳し相乖離して居たとすれば、内鮮開係は實に大なる悲劇であつたに相違ない。見す見す自分の祖先の文化の滅び行くのを見ることは、もつとも堪へ難いことであるに相違ない。併し幸に歴史や民俗は内鮮の文化同源をば完全に説明して呉れる。これは何んと喜ばしいことであらう。（完）(『總動員』1940年1月)

1. 1940年1月『總動員』に掲載され、1941年1月20日博文書館発行の『同胞に寄す』に収録された。『同胞に寄す』の目次では「朝鮮文學の將來」と誤記されている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 『同胞に寄す』では「王神宮に親祀す（炤智王）」「王始祖廟に謁す」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 『同胞に寄す』では「一、二月」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 『同胞に寄す』では「國有玄□之道。曰風流。說敎之源備詳神史。實乃包含三敎。接化羣生」に修正されている。□は「立+少」 [↑](#footnote-ref-4)
5. 先の修正に従って「吾道」は「國」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 『同胞に寄す』で「賞揚」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 『同胞に寄す』で「三国遺事」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 『同胞に寄す』で「断片的」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-8)
9. この部分は『同胞に寄す』で「永郎・述郎等の傳説」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-9)